はじめての万葉集【vol.29】

日本に現存する最古の和歌集『万葉集』をわかりやすくご紹介します。

秋の味覚は…

皆さんは秋の味覚といえば、何を思い浮かべるでしょうか。現在は栽培技術が発達し、一年中美味しい野菜や果物が手に入るため、食物の季節感が薄れつつあるように思います。万葉びとたちは季節の移ろいにとても敏感で、自然や植物をよく観察しています。その中でも、右の歌は、秋にちなんだ植物が六種類も詠まれています。

「梨・棗・黍・粟」は、いずれも秋に実を付けることから、その果実や穀物のことを詠んでいると考えられます。この「梨」は、現在私たちが食べている大ぶりな実ではなく、古代ではもっと小さな果実であったようです。『万葉集』において「梨」は「妻梨の木」（巻十）とも詠まれており、妻成シの木（「妻とする」の意）、もしくは妻無シの木（「妻がいない」の意）の両説があります。いずれにしても、古代の人びとの自然へのまなざしが、豊かな表現を作り上げていった一例といえます。

実はこの歌にも、植物の名前にかけた言葉遊びが隠されています。「黍」は「君」に、「粟」は「逢ふ」に、そして「葵」には「逢ふ日」の意味が込められています。このダジャレのような言葉遊びは、後に「掛詞」という和歌の技法として発展していきます。

この歌は、あなたに会いたい！という思いを、秋に実るたくさんの植物の名前を用いながら詠んでいるのですが、これは秋の宴席で出された料理にヒントを得て作られた、戯れの歌とも言われています。

植物の名前を巧みに使ったこの言葉遊びの歌は、『万葉集』の歌の技巧の成熟を示すと同時に、自然と共にある彼らの生き方が思われます。私たちも季節を感じながら、秋の味覚を楽しみましょう。

（本文　万葉文化館　大谷　歩）

梨棗　黍に粟嗣ぎ　延ふ田葛の
後も逢はむと　葵花咲く

作者未詳　巻十六　三八三四番歌

訳　（訳）梨、棗、黍に粟がついでみのり、蔓を伸ばす葛のように後にまた逢おうと葵に花が咲くよ。

奈良の梨栽培

奈良県のどこで、どのような梨が栽培されているか知っていますか？

県内における梨栽培の歴史は明治時代から始まります。大淀町の大阿太高原では「二十世紀」、斑鳩町周辺では「長十郎」という梨の栽培が行われていました。昭和40年頃からは「長十郎」に代わり「幸水」と「豊水」の栽培が始まり、現在の斑鳩町の梨を代表する品種となっています。梨は果皮の色で青梨と赤梨に分けられます。

大淀町の青梨「二十世紀」、斑鳩町の赤梨「幸水」と「豊水」、この秋は奈良の梨を食べ比べてみませんか？

問 県農業水産振興課
☎0742-27-7443
FAX 0742-22-9521

問 県広報広聴課　☎0742-27-8326　FAX 0742-22-6904